あそび大開発！！～あそびの中にある学び～

～就学に向けてつけておきたい力“生きる力”の育成～

鳥取福祉会　よねさと保育園　　大呂ゆかり

1．はじめに

乳幼児期は、生涯にわたる生きる力の基礎が培われる時期であり、身体感覚を伴う多様な経験が積み重なることにより、豊かな感性とともに好奇心、探求心や思考力が養われる。また、それらがその後の生活や学びの基礎になる。

子どもにとってのあそびは、あそぶこと自体が目的であり、時が経つのも忘れ、心や体を動かして夢中になってあそび、充実感を味わっていく。あそびにはさまざまな要素が含まれ、子どもは遊びを通して思考力や想像力を養い、友だちと協力することや環境への関わり方などを体得していく。満足感や達成感、時には疑問や葛藤が子どもの成長を促し、更に自発的に身のまわりの環境に関わろうとする意欲や態度を育んでいく。

保育の中のあそびの体験から生まれる子どもたちの興味・関心や意欲が小学校での学びや生活を支えるのだと思う。あそびの中で経験した友だちとのやりとり、気づきこそが『学びの芽生え』につながると考える。

そこで１年間のあそびを記録し振り返りながら、あそびの中にある学びを研究していきたい。また、あそびの中にある学びの要素を高め、保育者の資質向上につながるよう研究し、自らの保育を見直していきたい。

2．鳥取福祉会の取り組みの中で

昨年度より鳥取福祉会では『基礎学力～就学前プログラム～』として各施設の担当リーダーが集まり専門研修を行っている。専門研修では『基礎的な知識・技術を習得し、自ら考え、判断し、表現する力を身につける。発達の目安に基づいた保育を進める中で、保育者の資質向上を図る。』をねらいとし、４つのグループに分かれ（①書く・運筆、②切る・貼る・工作、③言葉・話す、④数・計算）公開保育と意見交換、あそびの実践持ち寄りを行い、保育者の資質向上に向けて取り組んでいる。

また、さまざまなあそびを通して楽しみながら学びの育ちをめざし、小学校へのスムーズな移行につなげていくことを目的として、福祉会全体、各保育園で取り組みを進めている。

3．研究内容・方法

（1）就学前に身につけておきたい基本スキルの検証。

（2）『あそび』『学び』『生きる力』とは何かを検証する。

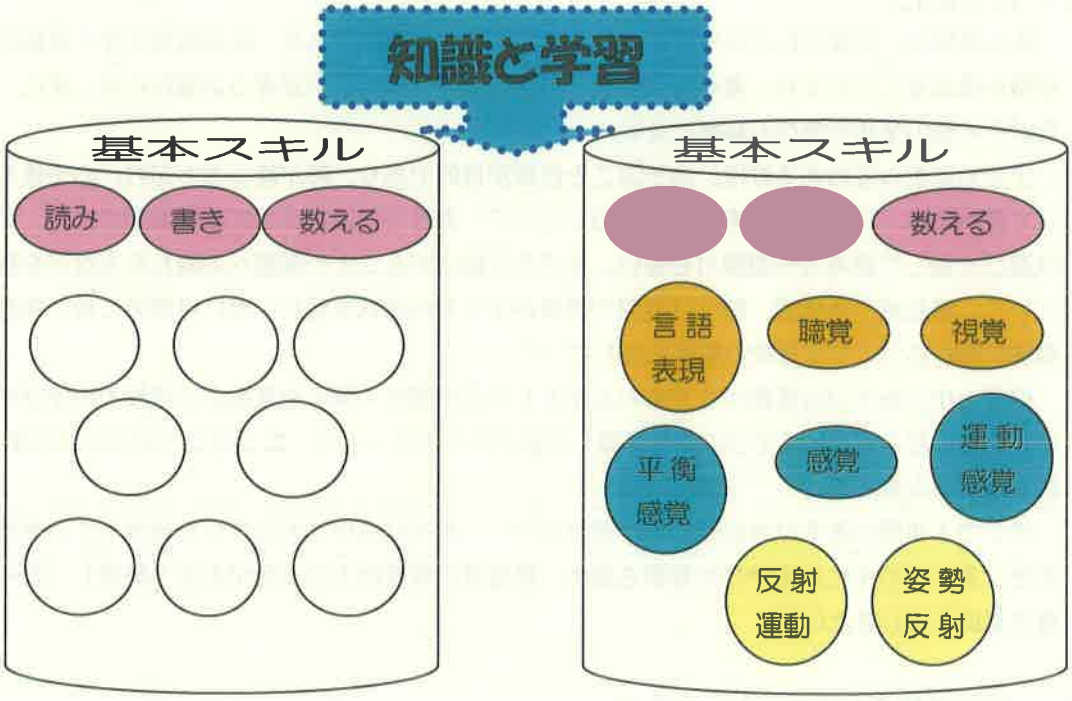
（3）福祉会で作成した『発達のめやす』に基づき、さまざまなあそびを展開し、記録する。
　　あそびが子どもたちの発達段階に適しているのかを検証する。（０歳児～）

（4）あそびの実践記録を振り返り、自分の保育の働きかけや環境を見直す。（３歳児）

（5）文献を参考、引用しながらあそびの中にある学びを確認し、保育のポイントを整理する。

基本スキルとは

小学校へ入学すると保育園とは異なり、読み書きなどの学習が入ってくる。保護者やまわりの大人たちは小学校へ入学すると直ちに読み書きを学び始めると思っているが、小学校へいくまでに生活、あそびの基本的スキルが身についていないと小学校での学びのステージに立つことは難しい。これが『小１プロブレム』である。基本的スキルが身についていない子は不安定な土台の上に家を建てるような物であり、家は安定しないし崩壊する恐れもあると考えられる。



《小学校に行くまでに～ロビン・コックス～》

たくさんの穴の開いた“かご”と穴がねじでふさがった“かご”があるが、ここに知識と学習の水を注ぐと穴の開いたかごからはたくさんの穴から水はあふれ出てしまう。しかし、ねじでふさがったかごからは水があふれ出ることはない。

このように乳児期からのあそびや発達をしっかりと経験し、成熟することで知識と学習内容は身につくと言われる。そのためには、乳幼児期から、『見たり、聞いたり、活動したり』する子どもに育てることが大切である。５才までは、『少しずつ、頻繁に』さまざまな遊びを経験し、スキルを身につけていくことが学習能力の向上につながると考えられる。一番上の『読み、書く、数える』だけを経験している子どもは、穴の開いたかごと同じように、知識や学習は身につかないことになる。

保育園の生活の中で人、物、ことすべてにおいて意欲や興味、関心をしっかりと育て、学びの芽生えの土台づくりをしていきたいと考える。

「あそび」「学び」「生きる力」とは

幼児の「あそび」は、自分が興味・関心を持ったさまざまなことにチャレンジする中で変化し、広がっていく。思考を巡らせ、想像力を発揮するだけでなく、自分の身体を使って友だちと体験を共有したり協力したりしながらあそびは発展していく。

幼児の「学び」は、「なるほど」と分かること、もう一度チャレンジしながら「やっぱり」と納得すること、そして次のあそびや自分の生活に生かすことなどを経験しながらさまざまな発見や関わり方を身につけていくこと。このような幼児の「学び」とは、小学校以降の学習内容に直接つながる物のみを言うのではなく、幼児がこれまでに身につけていたものをもとにしながら新たに気づいたり、理解が広がったり深まったりしていくものや、新たなことができるようになっていくものと考える。

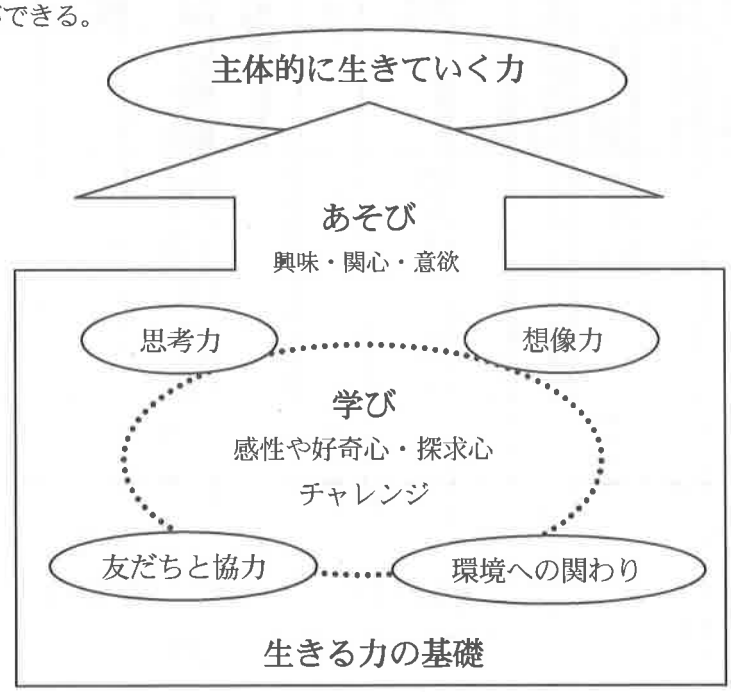
また、「学ぶ」ということばは「真似ぶ」ということばからきている。「真似ぶ」はだれかがやっていることを学んで身につける、体得することである。

子どもが興味・関心・意欲をもって環境に働きかけたり、環境から刺激を受けたりして「あそび」が生まれ、「あそび」を経験することにより、「学び」が生まれる。

子どものあそびは「学び」である。あそびを通して、共同し合い、関わり合い、譲り合い、助け合い、刺激を受け合って成長していく。その過程で育つのが、人としての根っこである。

「生きる力」とは、①自分で課題を見つけ、自らから学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力である。②自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性。③たくましく生きるための健康や体力。

また、３歳児の生きる力は、子どもが安定した気持ちで毎日の生活を送るためには、基本的な生活習慣を身につけることが大切である。楽しみながら自分のことを自分でしようとする意欲やできたという自信の積み重ねの中、一人ひとりがやりたいあそびを見つけ友だちとのあそびを進めていくことができる。



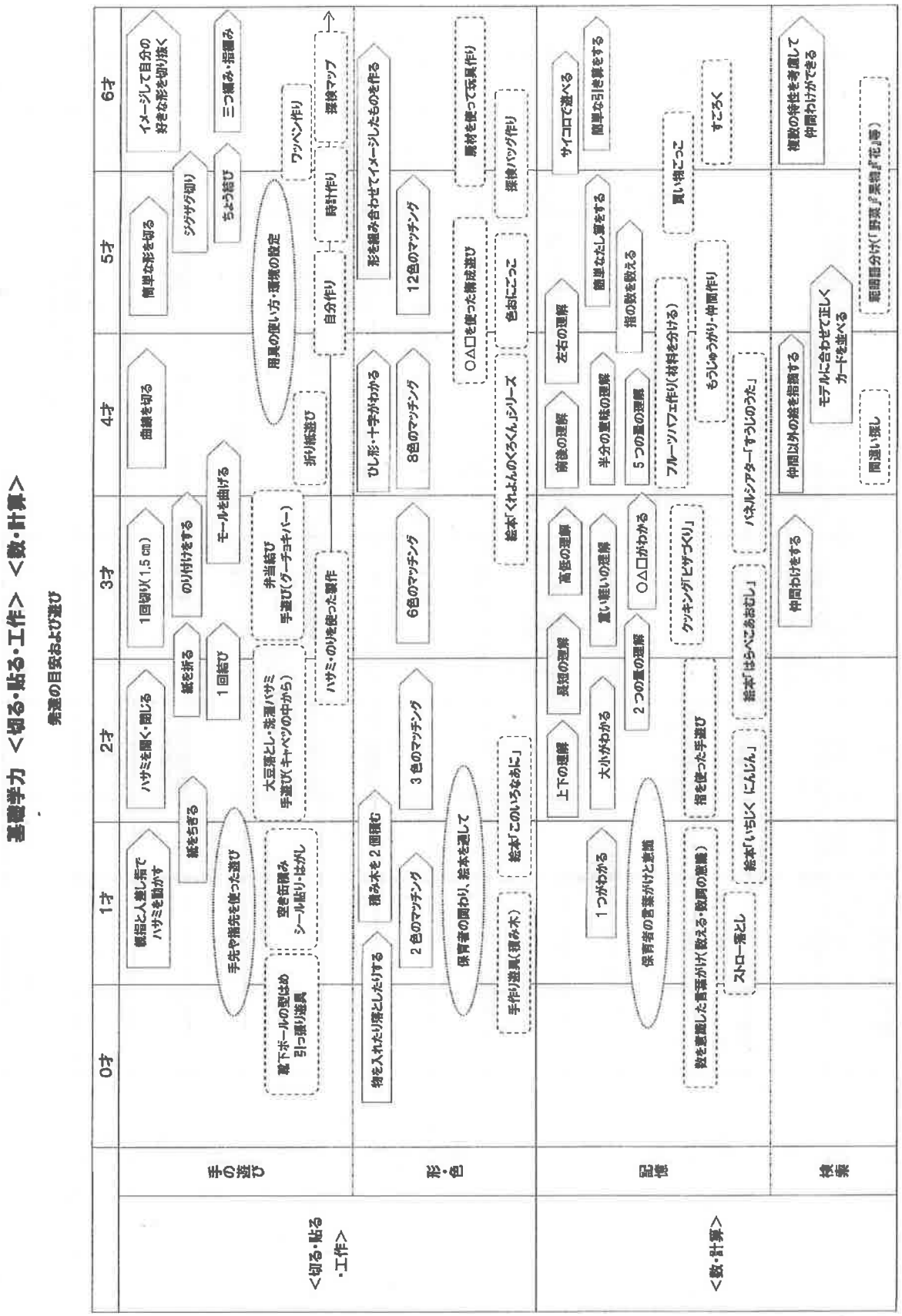
発達のめやす①（月齢１３ケ月～７２ケ月）

系	領域	部門	水準	項目/月齢	13	15	18	21	24(2歳)	30	36(3歳)	42	48(4歳)	54	60(5歳)	72(6歳)
運動	手の運動	手の遊び	静的上腕空間	はさみ・紙		薬指と人差し指で洗濯ばさみを動かす　洗濯はさみを外す	紙をちぎる	トングではさむ シールを貼る はがす	はさみを開く、閉じる 紙を折る	紙を切る	1．5cmの幅を切る 簡単な折り紙 のり付けをする	直線に沿って5mm程度切る セロテープを使う	点や線に沿って切る　飛行機を折って飛ばす 曲線を切る	簡単な形をはさみで切り・貼る	雑誌の絵を切り抜く 簡単な図形に合せて紙をちぎる テープを絞る ジグザグ切り	イメージして自分の好きな形を切り抜く
				粘土・砂			容器から容器へ移し替える	小麦粉粘土に指で穴をあける	意図的にちぎる、こねる、つぶす、固める、よせ集める	かき混ぜる 砂粒を拾う	粘土を丸める 粘土を容器に詰め込む、盛り上げる	のばす、ひろげる 型抜きをする	砂や粘土で好きなものを作り命名	トンネルを掘る 砂をかき出す	イメージした物を砂や粘土で作る	イメージを共有し友だちと協力して作る
				布・ひも	布をひっぱりだす	一度に数ページめくる	ひもを持っておもちゃをぶら下げる	ひもをたぐって引き寄せる 正しい向きでめくる	ひも通し 1ページずつ上手にめくる	一回結び (ナイロン)	モールを曲げて丸を作る 弁当包みを結ぶ	モールを曲げてV字型を作る	ひもの蝶結びをする	玉つなぎ (ビーズなど)	結ぶ(蝶々結び) ひもを棒に巻きつける　ほどく	三つ編をする 毛糸を指で編む モールをねじる
				遊具・楽器		鉛筆・サインペンの手挙回外握り	トンカチでたたく 簡単なリズム楽器で遊ぶ		鉛筆の手挙回内握りトンカチでペグを打つ	リズム楽器で簡単なリズムをとる	ねじをしめたり、ゆるめたり	鉛筆の静的三指握りスタンプを押す	きちんと楽器を打ち楽しくリズムが取れる	消しゴムでけす	鉛筆の動的三指握り　カナヅチで釘を打つ	こまを回す
認識	認知	物の属性の認知	物の永続性		2枚の布の一方に隠した物を見つける	2つのコップの一方に隠した物を見つける	3つのコップつぶの一方に隠した物を見つける	びんをひっくり返して飴を取り出す	包紙の中から飴を取り出す	箱の中から飴を取り出す	紙で飴を包む	触覚的に物を判断	視覚モデルを見て、触覚的手掛かり同じ図形を選ぶ			
			選択的視空間		ボードのペグを抜く	ボードにペグをさす	ペグを5～6本さす			袋の中に手を突っ込んで取り出す						
			図形の属性	形	器に物を入れたり落としたりする	積み木を2個積む 円、四角の型はめ	三角の型はめ	2つの型を合わせて1つの型を作る (パズル)	同じ型の3個1組のパズルの完成 円、三角、四角の型はめ	円、三角、四角、ひし形、十字型の型はめ	同じ型の6個1組のパズルの完成 円、三角、四角、ひし形、十字型の分類	円、三角、四角がわかる	形の仲間集め ひし形、十字がわかる	外接した図形を見て再構成	型を組み合わせて自分のイメージした物を作る	完成をイメージしながら構成して作る
				色・大きさ				2色のマッチング	3色のマッチング 2つの箱やコップを入れる	3個の箱やコップをいれる	6色のマッチング	4個の積み木を大きさの順に積む	6個の箱やコップを入れる 8色のマッチング	6個の積み木を大きさの順に積む	12色のマッチング	16色のマッチング
			空間の構成		積木やペグなどを重ねて積む	3個の積み木を積む	6個の積み木を積む	2個の積み木の横並べ	3個の積み木の横並べ	10個の積み木を積む　汽車や電車に見立てる	3個の積み木でピラミッド　車庫や道路を作る		6個の積木でピラミッド3個の積木で門、橋、トンネルを作る	10個の積木でピラミッド階段を作る5個の積み木で門、煙突のある汽車を作る		
		絵画制作	初期描画	書く・描く	なぐりがき 偶発的にチョンと印をつける	所かまわずフェルトペンでなぐり書き 意図的に印をつける	筆使いを真似る 指示で紙の上に印をつける	点や一筆書きを真似る	場所を規定してなぐりがき 真似をして縦線を描く	ほぼ垂直に線を引く 交差して2本以上の線を引く	ほぼ水平に線が引ける	ほぼV字が書ける	手本の通りに2点を結ぶいろんな線を引く	曲り角のある道路の中に線を引く	指で触った物の形を描く	自分で迷路を描く
			形態模写	形・線				ぐるぐる丸らしきものを描く	真似をして丸を描いたつもり	真似をして横棒をまっすぐ引ける	円の模写が可能 真似をして斜め線を引く	正方形の模写が可能 十字形の模写が可能	三角形の模写が可能 真似をしてジグザグの線を引く	型板を使って絵を描く	真似をして波線、螺線を引く	ひし形の模写が可能
			創作	人物画							頭の輪郭らしきものを描き、目と口をつける	頭の輪郭に目と口と鼻がつく	いわゆる頭足人を描く	顔、胴体、手足をそなえた人物画	絵を描き、色を塗りこむ	人物画ほぼ完成 (三方向、前、横、後)
				創作画								画用紙いっぱいに絵を描き、色を塗る	黒板などに大きく絵を描く		枠からほとんどはみ出さず色を塗る	絵の具を使って描く 経験した事を描いて楽しむ
		視覚的言語	文字	読字							文字のマッチング	平仮名2音節語のパターン認識ができる(りす→り+す)		絵本の拾い読みができる	50音表が読める1～10までの数字が読める	内容を理解して絵本が読める
				書字										平仮名の模写が可能	自分の名前を書く	聞いた平仮名1音を書く

発達のめやす②（月齢１３ケ月～７２ケ月）

基	領域	部門	水準	項目/月齢	13	15	18	21	24(2歳)	30	36(3歳)	42	48(4歳)	54	60(5歳)	72(6歳)
認識	音声・言語	発語	量	単語量質		身近な物の名前をいくつか言う	絵カードを見て10語使う	絵カードを見て20語使う	幼児語と成人語が置き替わり始める 自分の愛称を言う	有意味語100～300語言う 自分の姓名を言う	幼児語をほとんど使わない	自分の愛称から「私の」という言葉に置き替わり始める	「私」という言葉を使う	両親の姓名を言う	自分の大まかな住所を言う	
			発話運動	構音	p、b、mの出現 プ、ブ、ム）	t、d、nの出現 （トゥ、ドゥ、ン）		k、gの出現（ク、グ）	hの出現（ハ）	s,tsuの（ス、ツ）						
				模倣		単語を模倣する		2つの数詞の復唱をする		二語文（形容詞・名詞）の復唱	5つの母音の模倣 3つの数詞の復唱可能	2つの形容詞＋名詞の復唱可能 3つの数詞の反唱可能		4～5語の文章の復唱	8～10語の文章の復唱	
			文法発話	語連鎖		一語文で話す	二語文で話す 疑問詞「これは？」を使う		三語文で話す （例）「ママ、あっち、いった」	助詞の入った三語文で話す		受身文で話す		複文を使って話す		仮定形を使って話す
				品詞の使用					疑問詞「何」を使う 物の使い方を説明 「これ」など代名詞を使う	疑問詞「だれ」、「どこ」を使う	疑問詞「いつ」を使用する	接続詞を使用し始める （例）「でも」	「どうして」を使用する	過去形の動詞を使用する	未来形の助動詞を使用する （例）「～したい」 「～なりたい」	
		理解言語	記憶	概念・空間					上下の理解	長短の理解	高低の理解		前後の理解	左右の理解	いくつかの地点の順序付け	
				時間						「あとで」がわかる	遅い、早いがわかる	過去、未来の言葉を言う	夜や昼の理解	曜日を理解する 季節を理解する	時間の経過に従って3枚のカードを並べる	誕生日の理解
				数量				1つがわかる	大小がわかる		2つの量の理解 重い軽いの理解		5つの量の理解 半分の意味の理解	指の数を数える 5個の対象の保存	簡単な足し算をする	さいころで遊べる 簡単な引き算をする
				感覚				きれい、汚いの理解	多い、少ないの理解 赤、青、黄の中の2つの理解	赤、青、黄の理解		同じ、違うの理解	手触りことばの理解 3色の理解	感情を表す言葉を使う		感情を表す3枚の絵を見て、話を組み立てる
				その他						男女がわかる	丸、三角、四角の理解	丸い物の名前を2つ言う			反対後の理解 似ている点、異なる点の指摘	
				文章暗記				簡単な繰り返しのある絵本を楽しむ		簡単な物語を聞ける	物語を5分間聞く	経験をしたことを話せる	短い物語の内容を記憶する	絵を見ながら同じ図形を選択する	絵本の中から2つの質問に答える	その日の出来事を順序立てて話す
			検索	仲間分け							仲間分けをする	仲間以外の絵を指摘する		モデルに合せて正しくカードを並べる	つじつまの合わない所をみておかしがる	複数の特性を考慮して仲間分けができる
				しりとり								3つのものを言われた順番に並べる 言葉と物が合う	動物、食べ物等の範ちゅう語を3つ言える	「あ」のつくことばなどでことばをつくる	簡単なルールでしりとりをする （同じ言葉が出て来ない）	自分たちできめたルールでしりとりをする （例）生き物、食べ物

発達のめやすからみたあそびの計画（0～6歳を見通して）



切る・貼る・工作（０歳～５歳の保育を考える）

手の運動・あそび

発達のめやすを参考にしながら、月齢に合わせたあそびを保育者が意識的に取り入れることが大切！

《１５ヶ月》

◎発達のめやす…親指と人差し指を使って動かす

指を使って大好きな玩具をしっかり握る。保育者が傍で見守り、一緒にあそぶことで大好きな大人の模倣からあそびが始まる。

《２１ヶ月》

◎発達のめやす…シールを貼る、はがす

顔の中の歯をイメージして、ビニールテープを貼ったり、はがしたりしてあそぶ。親指、人差し指をしっかり使って集中してあそび姿がみられた。

歯に意識し、はみがきへの興味、関心につなげることができた。

《５４ヶ月》

◎発達のめやす…簡単な形をはさみで切る・貼る

◎形を組み合わせイメージした物を作る

○△□などの形をはさみで切り、切った物を組み合わせて構成遊びを楽しむ。形を組み合わせる中で子どもたちのイメージはどんどん広がり、つぶやきも多く聞かれた。こどもたちの自由な発想を大切にする。

《１８ヶ月》

◎発達のめやす…紙をちぎる

両手を使った指先の動作が苦手だったため新聞紙や広告紙より柔らかく薄い素材のお花紙を使ってちぎることを楽しむ。指先の操作が未発達の子は無理矢理ちぎってしまうため、個々の発達を確認する。

《３６ヶ月》

◎発達のめやす…１．５㎝の幅を切る

始めに安全なはさみの持ち方、使い方を知らせる。広告の１．５㎝幅の紙をリズムよく切っていく。切ることが楽しくて広告の紙が山になるほど楽しんでいた。子どもたちの集中力に驚かされる。

《７２ヶ月》

◎発達のめやす…イメージして自分の好きな形を切り抜く

◎完成をイメージしながら構成して作る

楽しみにしているディキャンプに必要なワッペン作りということで、集中し、はりきって作る姿が見られた。厚さの違う紙を使用することで力の加減に気をつけながら操作することができはじめる。

６歳の到達目標をしっかりと確認し、各年齢に合わせた保育を組みたてる。

《考察》

・６歳の到達目標をしっかりと念頭に置き、０歳からの発達の連続性を大切にしていく。年齢が低くなればなるほど、保育者の主導的な保育になりがちなため、発達のめやすを確認しながら日々の保育が楽しいと思える、あそびの展開をしていくことが大切。

・０歳児の親指と人差し指の操作が３歳児からのはさみの巧みな操作、切り方につながり、構成遊びや自分のイメージであそびが展開できるようになる。０歳からの発達を保障することが大きな力となり、「やってみたい」「挑戦したい」の意欲につながっていくのだと考える。

また、『数・計算』の取り組みの中で、０歳児では安心できる保育者との信頼関係を大切にし「１，２，３…」の語りかけの中、手作りの積み木を積んだり、倒したりと繰り返しのあそびを楽しむ。保育者の模倣をして楽しむ姿が見られる。

１歳児では手先の発達を促しながら、チップ落としを楽しむ。子どもたちと遊ぶ中で「１，２，３…」とチップ落としをしながら唱えることが出来るようになる。

２歳児では絵本『あるくおだんごくん』の読み聞かせから、小麦粉粘土を使ってお団子作りを楽しむ。「大きい団子が出来た」「いっぱい作ったで！」と満足感いっぱいの子どもたち。大小がわかり、２つの量の理解を達成することが出来た。

３歳児では半分の意味を理解し、友だちと分け合うことの理解を確認する。グループの友だちの人数を数えたり、数個の積み木を友だちと分け合ったりする。一人では出来ないことを友だちとのやりとりの中で楽しんでいく。

４歳児では指の数を数え、５つの量の理解をする。造形あそびの中でスパンコールの数を数えて貼っていく。指の数とスパンコールの数をしっかり確認し、１対１対応が正確に行われるようになる。

５歳児では簡単な足し算、引き算をしながらわらべうた遊びの中でグループになって遊ぶ。ことばの数に（りんご（３文字）→３人）合わせてグループを作り、足りない人数を考える。遊びの中で足したり、引いたりしながら仲間作りを楽しんでいく。

《考察》

・数や形をあそびの中で楽しむことの「気づき」が好奇心や探求心になり、「便利だな」「おもしろいな」という気持ちが生活へ取り入れる力になると考える。

・子どもが具体物に接する中で、保育者が数に関する適切なことばをかけると、子どもは頭の中で数の大きさをイメージできるようになる。あそびや活動の中で物と数を対応させる経験をたくさん取り入れることが大切。子ども自身が「見て」「考えて」「体験する」ことで、数量の感覚が豊かになり、小学校での学習の土台となると考える。

あそびの実践と考察（３歳児の事例より）

同じ場所、同じあそびを楽しんでいても平行あそびの３歳児。さまざまなあそびを通して一人から数人にと友だちとあそぶことが楽しい、友だちとつながることが嬉しいと感じられる経験を多く取り入れていく。自分の力を感じ取り「もっとしたい」「こんなこともしたい」と生活やあそびを広げイメージやことばの土台を膨らませながら、子どもの育ちを見ていきたい。３歳児のあそびの中の『学びの芽生え』を意識しながら一年間のあそび、環境構成、保育者の援助のあり方を振り返り、保育の見直しを行いたい。

事例１　洗濯ごっこをしよう！６月４日（月）

ねらい…○まわりの大人の模倣遊びを楽しみ生活経験を豊かにし、人の役に立つことを喜ぶ
○感動体験の中でことばを豊かにする
○あそびを通して「楽しかった！」の満足感や達成感を味わう

学びの要素…○経験したことを話す（理解言語・記憶・文章暗記）
○形容詞、名詞を使う（発話・発話運動・模倣）
○手触りことばの理解（理解言語・記憶・感覚）

天気の良い日が続き、プールあそびを心待ちにする子どもたち。戸外に出ると、水道のまわりで水遊びが始まる。あそびに夢中になっていたN児のハンカチがたらいの中に落ちて、濡れてしまう。N児は半べそをかきながら、保育者に訴える。N児の悲しい気持ちを受け止め「Nちゃん、お洗濯しよう！」と声をかけると泣きそうだった顔が笑顔に変わっていく。保育者とN児の関わりを見た周りの子どもたちは駆け寄ってきて、自分のハンカチを取り出し、大騒ぎの洗濯屋さんがオープンする。

暑い日差しの中「水がキラキラ光ってきれい！」「冷たくて気持ちいい～」と思いや状況が自然にことばで発せられる。

また、「お母さん、こんなんでぎゅーっとするでー。」「うちはお父さんがパンパンってして干すで。」など見たこと、経験したことを思い出しながら我先にと伝え合う。子どもたちは生活の中で経験したことを再現しながらごっこあそびを楽しんでいる。遊びの中でハンカチの洗い方（模倣）、絞り方を一人ひとり確認しながら生活経験の差を埋める保育を展開する。

洗ったハンカチを干せるよう、ロープ、洗濯ばさみを子どもの目線に準備する。「どうやって干すだ～」と戸惑う子ども、経験を頼りにロープにかけ、洗濯ばさみではさむ子がいた。洗濯ばさみの使い方にも個人差が見られた。

干すことが出来ると満足感を味わい、「まだしたい！」と次

への意欲につながる。保育者のハンカチ、保育園のままごとで使っているハンカチなどを集めて、洗濯ごっこが続く。それでも終わらない子どもの意欲に園長先生のところに行き、「洗濯屋です。何か洗濯する物はないですか？」と子どもたちと一緒に訪ねる。園長先生は子どもたちの思いを受け止め

「ずっと忘れていたハンカチが３枚あるので洗ってください！」と差し出す。子どもたちは嬉しくて得意気に「はい！」と答える。洗濯が終わると一人ひとり誇らしげな顔。

自分たちが洗濯したハンカチが気になりながら、給食を食べ、お昼寝をする子どもたち。起きるとすぐに、「ハンカチ乾いたかな？」とドキドキが止まらない様子。時間が経つことで乾いたハンカチを見て、「もうからからになっとる！」「水がついていない。どうして？」と友だちと見合わせ、水はお日様の力で“乾く”ことを遊びの中で知ることが出来た。

乾いたハンカチを園長先生に届けた子ども。「ありがとう！とってもきれいになったね」と声をかけられると役に立った喜びと満足感で子どもたちの顔はキラキラ輝いていた。

《考察》

・ハンカチを落としてしまったN児の悲しい気持ちに保育者が寄り添い、洗濯ごっこを提案。失敗も楽しいことに変えてしまおう！のプラス思考で、一人の子どもからクラス全体にあそびを展開することが出来た。保育者は日々の子どもの姿からあそびを楽しめる、盛り上げる環境に柔軟性を持ち保育を展開することの大切さを感じた。

・洗濯ごっこを通して、身近な大人の模倣をすることで生活経験が豊かになり、３歳児なりの誰かのために役に立った“役立ち感”を味わい、感謝されることに嬉しい気持ちになること、感情の高ぶりを感じ、より自信が持てるようになった。

・あそびの中で感じる心地よさや、今まで経験したことを友だちや保育者に自然とつぶやくことができた。一人ひとりの気づきやつぶやきをしっかりと受け止め共感することで、子どもの好奇心ややってみようとする気持ちをくすぐり、自ら行動する姿につなげたい。

事例2　ホースの水はどこまで続く？（水あそび）　6月6日（水）

ねらい…○水の感触を味わいながら、友だちと一緒に遊ぶことを楽しむ。
○「どうしてそうなるの？」の取り組み（理解を広げるあそび）
○浮いたり、沈んだりする様子を見て、探求心を育む。

学びの要素…○「どうして」を使用する（発話・文法発話・品詞の使用）
○遅い、早いがわかる（理解言語・記憶・時間）
○重い、軽い理解（理解言語・記憶・数量）

先日の洗濯ごっこから水あそびに夢中の子どもたち。本時は水道からでる水を使って樋を組み合わせ、水の流れに興味が持てるようあそびを展開する。

樋を使って保育者とH児が内緒話をする。ざわざわしている他児たちも話を聞こうと静かになるが樋の中での会話は聞こえない。より集中し静かになる子どもたちの目線は樋に集中する。

「どうして聞こえんだぁ」「僕も聞きたい！」と興奮気味のT児。「電話みたいだなぁ」とY児。「先生みんなにも教えて！」とせかしながら本時のあそびに期待を持つ。H児が保育者の話を聞いてまねをしながら他児に伝える。「この樋を使って水遊びをします」といつもはおとなしいH児は得意げにみんなに伝える。

「樋って何？」電話みたいなものが樋という名前のもの、水あそびに使うものということを知る子どもたち。

ゲームボックス、タライ、樋を組み合わせ水道の水の流れを楽しむ。「先生！すご～い。水がタライにいっぱいになった！」と歓声を上げる。タライの中でスーパーボールや葉っぱ、小石、ビー玉を入れて遊ぶ。

先日の洗濯ごっこを再現し、見つけてきた葉っぱをきれいに洗う子どもの姿も見られた。浮き沈みの様子に気づいた子どもに寄り添い、保育者が浮く・沈む様子を状態と関連づけて何度も言語化していく。子どもたちは聞くことで理解し、関連性を知っていくことが出来る。

次に樋からさまざまな物を流してみることにした。
スーパーボールと葉っぱを流そうとするこども。「先生、スーパーボールはころころって転がって流れるけど、葉っぱは流れんで！」と疑問に思ったことを訴える。聞いていた他児が「きっと水の力が足りんのだぞ。もっと力一杯出してみよう！」とつぶやく。

保育者は水道の水を強め、子どもの要求に応えながら遠くで見守る。「出したで～。流れた？」と訪ねると「もうちょっと！出して。」と催促をする。保育者と子どものやりとりは続く。

少しすると「やった～流れた～！」と大きな歓声が上がる。子どもの「もっと！」の思いに寄り添うことで、流れたときの感動は大きいと感じた。また、やってみたい、試してみたいの気持ちが保育者との駆け引きの中で育んでいくのだと感じた。

子どもたちは時間を忘れて、探求あそびを満喫することができた。満喫し、満足感を味わった子どもたちの片づけは言うまでもなく、あっという間に終えることが出来た。

《考察》

・樋をどのように使ったらよく流れるのか？どんな物が流れやすいのか？種類によっての浮き沈みをあそびの中で子どもたち自身が経験し、探求心を持つことが出来た。

・遅い、早いの理解や重い、軽い理解はことばで知らせても理解できないが、あそびや生活の中で具体的に２つの物を重ねたり、持ち上げたりして見たり、試したりするなど実体験の大切さを改めて感じた。

・あそびの中でわくわく、ドキドキ感を味わいながら、おもしろさを発見すること、水あそびを満喫することができ、子どもたちの不思議、真剣なまなざしを見ることができた。

・高いところから低いところへ水は流れるという仕組みを体験することができた。

・保育者は子どもたちの質問や疑問にきちんと丁寧にわかりやすい言葉で説明するよう心掛けていくことが子どもの好奇心を揺さぶることにつながると感じた。

・あそびを通して驚きや発見を経験することで、今まで知っていることを改めて注意深く意識し、探求心を目覚めさせ、子どもの学びを確実なものにしていくのだと感じた。

事例３　親子で探求あそび（保育参加日）　６月９日（土）

ねらい…○いろいろな水遊びを楽しみ、開放感を味わう
○友だちや保護者の方と探求あそびを満喫する
○「もっとしりたいな！」の取り組み（理解を深めるあそび）

学びの要素…○砂で好きな物を作り命名（手の運動・手のあそび・静止的上腕空間）
○６色のマッチング（認知・物の属性の認知・物の永続性）
○同じ、違うの理解（理解言語・記憶・感覚）

今年度初めての保育参加日では、３歳以上児と保護者の方全員で探求あそびを楽しむ。内容は色水・草花あそびと砂場あそび、作ってあそぼうコーナーを設置し、自由に選択できるあそびを準備する。

戸外を選択した子ども、保護者には芝の気持ちよさを知ってもらおうと裸足での参加を呼びかける。

Ｓ児はお父さんと参加。はりきって園庭に出るが、浮かない顔。「どうしたの？」と聴いてみると「裸足はイヤだ！チクチクするから」と小さい声で答えた。今までのＳ児は裸足での戸外の活動を嫌がり、園庭でのかけっこもすぐに「疲れた！」と休んでいたなどの姿を思い出した。

せっかくのお父さんとの活動が出来なくなったらと心配し、「いいよ。チクチクがいやだったら靴を履いておいで」と臨機応変にことばをかける。Ｓ児は嬉しそうに靴を履いたと思いきやお父さんとの探求あそびに夢中で遊ぶ。

お父さんは子どもの頃経験した、色の混ざり合い、じょうごの使い方、草花の絞り方など遊びの中で丁寧にＳ児に伝えてくれる。保護者が存分に楽しむことで、子どもたちの「やってみたい」気持ちは盛り上がるのだと感じた。あそびに夢中になったＳ児の足下を見てみると靴を脱ぎ捨て、びっちゃんこになってあそび、芝のチクチクした痛さはあそびの楽しさで吹っ飛んだ。

草花であそぶ子どもたちの様子をみていると、どのように用具を使って草花の色を出せばいいのかわからない３歳児のＩ児。５歳児の子どもは今までの経験からすりこぎとすり鉢を器用に使い、草花の色を出して楽しむ。Ｉ児は５歳児の様子をあこがれのまなざしで見つめる。Ｉ児にも経験させてあげたいとの思いから「Ｉちゃんもやってみる？」と声をかけると、うれしそうにうなずく。それを聞いていた５歳児が「私が教えてあげようか？」と持っていた用具を貸してくれ、草花の汁の出し

方を教えてくれた。I児は模倣をしながら少しずつ自分でも出来るようになる。保育者が教えるのは簡単であるが、そうではなく異年齢児保育の中で自然に身についた光景が嬉しく感じられた。

「先生もやってみよう！」I児と一緒に草花の汁を集めて、ジュースを作った。I児の初めて作った喜び「楽しい」「おもしろい」に共感しながら「もっと」「次は〇〇したい、できるかな？」の思いにも寄り添いあそびを展開していきたい。

また、花の種類や色によって出る汁の色が違っていたこと、それぞれにおいがすることなどをあそびの中で、経験することが出来た。

初めての経験の中で作ったジュースを誇らしげに両手に抱えるIは自信に満ちあふれていた。

《考察》

・探求あそびは、あそびの中でさまざまな不思議を発見したり、試したり、工夫したりと子どもたちの「やってみたい！」「もっと」のワクワク感やドキドキ感を引き出すあそびと考える。

・お父さん、お母さんと一緒にあそぶことで楽しさを共感したり、アイデアに驚いたりと子どもたちの顔には笑顔があふれていた。

・園庭の花を摘んですりこぎですりながら水を入れると、花の色水が出来ることを知り、「今度はこっちの花にしよう！色はどんな色になるかな？」と、やってみたいことをどんどん考え、自発的にあそびを楽しむようになった。

・草花の汁、絵の具のさまざまな色に触れ色彩感覚を養っていく。色と色との混ざり合いの変化草花の種類によって色が違うことなどを実体験の中で学ぶことができた。

・あそびを通して、楽しかった満足感や充実感を味わうことができ、このような経験の中で「もっと知りたい、またしたい」への意欲、関心が芽生え、『学びの芽生えの育ち』の土台となるのだと感じた。

事例４　お店屋さんごっこ（地域・保護者を招いて）

１０月３０日（火）３１日（水）

ねらい…○保育者や友だち（保護者）と簡単な言葉のやりとりをして楽しむ
○経験したことをごっこあそびに取り入れ、なりきってあそぶ
○買い物券１枚と商品１個の１対１対応ができる

学びの要素…○経験したことを話せる（理解言語・記憶・文章暗記）
○受身文で話す（発話・文法発話・語連鎖）
○２つの量の理解（理解言語・記憶・数量）

毎年恒例のお店屋さんのオープンする時期が近づき、子どもたちも準備で大忙し。お店、商品も子どもたちと一緒に決めクラス、異年齢の友だちと商品作りを計画的に進めていた。さまざまなな廃材を使って工夫して作る楽しさは、オープンを楽しみにするこどもたちの象徴であると感じた。

お店屋さんごっこのテーマを『ハロウィン』とし、絵本の読み聞かせの中でイメージを高めていく。発表会の衣装を活用し、雰囲気が持てるよう工夫していく。

お店屋さんごっこには保護者、地域、小学校等にも招待状を出しお客さんとして買い物に来てもらうようお願いをした。また、子どもたちのイメージを盛り上げてもらうよう、仮装をして参加してもらうように依頼する。

当日は保育者の願い以上にたくさんのお客様が仮装をして参加してくださる。子どもたちの張り切りは言うまでもなく『ハロウィンストアー』は大盛況であった。

３歳児の子どもたちは、絵本袋に３枚の買い物券を持って買い物に出掛ける。年長児の「いらっしゃいませ！いかがですか？」と声をかけられ、ドキドキしながら買い物をする。「これください！」と言葉で伝えられる子、無言でお買い物券と交換する子、はずかしくていつまでも買い物ができない子とさまざまであった。一人ひとりが買い物を楽しんでいるのか？満足できているのか？を確認しながら一緒に楽しめるようにする。まったく買い物ができない子Ｙ児のそばで様子を見ていると、ほしい物があっても、その気持ちを言葉に出して伝えることができない様子が伺えた。

普段の生活の中でも友だちに思いを伝えることが苦手である。またいろいろな部分で経験不足が感じられ、あそびへのイメージが持ちにくい姿が伺えた。

保育者が「お店の人からいらっしゃいませって言われたら、

なんて言ったらいい？」と訪ねると「わからん」と素直に答える。

ごっこ遊びの中でイメージを持ち、買い物をしたり言葉のやりとりを楽しんだりしてほしいとの願いから、「友だちの様子をみてみよう！」とまわりの子どもに目が向けられるように伝える。お店の商品に気をとられながらも、友だち同士のやりとりを見ようとする姿が見られた。

友だちの模倣をしながら、買い物に挑戦しようとする。傍で見守りながら、様子をうかがう。小さな声ではあったが、おいしそうなバーガーを握って「これください！」と買い物券を差し出す。初めてのやりとりでドキドキだったはずが、H児の顔は自身に満ちあふれていたように感じた。

お店屋さんごっこはそれから２日間続き、ごっこあそびの楽しさ、言葉のやりとり、なりきって遊ぶ楽しさを感じた。また、人とのつながりを感じることができたと思う。

《考察》

・ごっこあそびは生活の中で経験したことをあそびに再現し、楽しみながらなりきってあそぶあそびである。ごっこあそびは一人ではできない、人と人との関わりの中で成り立ち、言葉のやりとりや模倣あそびから生まれる。

・経験の差でイメージが持ちにくかったり、必要な言葉のやりとりができなかったりするが、友だちや異年齢児との関わり、やりとりの中でイメージが広がったり、共有できたりするのだと感じる。

・ハロウィンのイメージは絵本を通して伝えた。絵本は子どもの創造力に大きな影響力を持つことを感じた。イメージを広げながら、友だちのつぶやきを聞いたり共感できたりする経験ができたと思う。

・買い物券１枚で、品物１個が購入できることを知り、あそびの中で１対１対応が自然に身につき、経験の中で確立することができた。

・今回は園内だけでなく、保護者、地域、小学校との連携の中でよりお店屋さんごっこが盛り上がり、自分たちが作ったお店に来てくれた喜びを感じることができた。また小学校との連携の中で子どもたちの生き生きした姿が見てもらえ、小学校へのスムーズな移行につながることを願っている。

事例5　こぐまショップへようこそ！　１１月６日（火）

ねらい…○保育者や友だちと簡単な言葉のやりとりをして楽しむ
　　○ごっこあそびを通してイメージを膨らませ、なりきってあそぶ
　　○売り役、買い役を経験する

学びの要素…○経験したことを話せる（理解言語・記憶・文章暗記）
　　○２つの量の理解（理解言語・記憶・数量）

先日楽しんだお店屋さんごっこは大盛況に終わる。クラスの中では楽しかった経験を再現しているかのように、ブロックで作った時計やネックレスを机に並べて、「いらっしゃいませ！ステキな時計はいかがですか？」「２個ください！」とお金に見立てたブロックをお店の人に渡すなどのやりとり、あそびの光景をよく見かける。保育士の傍にも持ってきて訪問販売が始まる。

数日後子どもたちのあそびの展開を見ながら、クラスでお店屋さんを開くのも楽しいのでは？と机を並べお店の看板を立てる。その様子を見ていたN児が「先生！お店屋する～？」と目をキラキラさせる。前回残っていた商品を集めて、『こぐまショップ』を開店することにした。

園全体で売り手をしていた年長児へのあこがれも大きく、売り手になりたい子が続出する。グループ毎で順番を決め売り手と買い手を決定する。やってみたい！気持ちが強いのかルールや決まりを守ろうとする。

買い物をするというイメージを一人ひとりが持ち、それに必要な言葉のやりとりを楽しむことができた。やりとりが苦手だったＹ児も自然に言葉を交わし、楽しむことができた。

園全体で行ったお店屋さんごっこの会場では聞けなかった子どものつぶやきや売り手の子どもとのやりとりの場面など子どもの成長を感じた。

全員が売り手、買い手を経験したあと、よりあそびが盛り上がるよう他クラスの子どもに呼びかけ、買い物に来てもらえるように職員間で連携をとる。

２歳児が買い物に来たときは年上としてのプライドが見え隠れし、自信を持って商品を進めたり、買い物を促したりする姿が見られた。また、恥ずかしくて買えない子に「何がほしい？ペロペロキャンディーがおいしいよ！」とやさしくアドバイスする子どもの姿が見られた。年上としての自覚や、やさしさが

育っていることを嬉しく感じた。

５歳児年長児が買い物に来たときは、恥ずかしそうな中にも自分たちのお店という自信から大きな声で接客をする姿が見られた。商品を買い物券と交換したり、買ってくれた友だちに大きな声で「ありがとうございました」と声をかけたりする子どもたち。以前の経験が本時のやりとり、自信につながっていることを実感する。

楽しい環境、あそびの中には子どもたちのやってみたい気持ちがどんどん膨らみ、もっとしたい！気持ちが高まる。その中では友だちとのやりとり、ことばのやりとりが活発に行われていく。自分たちのお店を開くことができた喜びと子どもたちの自信は大きく成長したと感じる。

《考察》

- ３歳児中心でのあそびの展開で、やりとりがうまくできるかな？と心配していたが以前のお店屋さんこっごの経験からスムーズに進めることができた。保育者が話すたくさんの言葉よりもたった１つの経験こそが子どもたちの力になっているのだと感じた。また、自分たちのお店をオープンできたことが大きな自信となっている。
- 楽しい環境、あそびの中には子どもたちのやってみたい気持ちがどんどん膨らみ、もっとしたい！気持ちが高まる。保育者は子どもの興味、関心を柔軟にキャッチし、保育の展開、環境構成を行うことが大切であると感じた。
- ごっこあそびは人と人との関わりを豊かにしてくれる。イメージを共有することは難しい３歳児ではあるが、保育者が仲立ちとなりながらあそびを展開させ、友だちと関わることの心地よさや楽しさをしっかり味わっていきながら、今後もごっこをあそびに取り入れ生活経験を豊かにしていきたい。

事例6　積み木あそび～１人から数人へ～　　１月１７日（木）

ねらい…○積み木を使って思い思いの物を想像して作る
　　○気の合う友だちと好きなあそびを見つけて楽しむ
　　○遊具を分け合ったり、順番に使ったりする中で決まりを守る

学びの要素…○４個の積み木を大きさの順に積む（認知・物の属性の認知・色大きさ）
　　○円、三角、四角がわかる（認知・物の属性の認知・形）
　　○高低の理解（理解言語・記憶・概念、空間）

朝の自由あそびの時、積み木を自分たちで選択し、二人の子どもが積み木であそび始める。「家を作ろう！」とそれぞれが自分の家をイメージしてつくり出す。「二階も作ろう！」「入り口はここ！」などイメージしたことを積み木で表現する。

H児は「倒れんように強くする！」と積み木を敷き詰めながら高く積み上げていく。M児は「いっぱい窓があるよ」と積み木と積み木の間の隙間を窓に見立てる。同じ家を題材にしても二人のイメージは違うことがわかる。また、場を共有しながらそれぞれが独立してあそぶ、平行あそびが見られる。

一人の女の子があそびに興味を持ち「Ｓちゃんもする～」とあそびに加わる。友だちのあそびを見ながら、模倣して家づくりを楽しみ始める。Ｓ児の家のイメージはM児のイメージに近く、積み木を横、縦に組み合わせ高く積んでいく。しかし同じイメージと思ってみているとＳ児は「先生の部屋はここ！Ｎちゃんの部屋はここがいい？」とマンションをイメージしながらあそびを展開していた。先日絵本『１００かいだてのいえ』の読み聞かせをＳ児が喜び楽しんでいたことを思い出す。自分の経験や絵本での事柄があそびに連動していることを感じた。

三人がそれぞれのイメージで家作りを進める中、積み木の数が足りなくて、一番最後にあそびに加わったＳ児が他児の積み木を勝手にとったり、「Ｓちゃんだって使いたいんだもん！」とわがままを言ったりし始める。友だちに積み木を１つ１つ借りながらも、高く積み上げた自分の家に満足するＳ児。「Ｓちゃんの家が一番高い！」と自慢げに嬉しそうに伝える。

高い家はできたもののもっと大きな家を作りたいと思ったＳ児は、M児に「Ｍくん、もっと大きな家をつくろう！」と誘う。三人それぞれが積み木を使うとこれ以上高い物、大きな物を作ることは難しいと考えたM児とＳ児は二人の積み木を合わせて新しい物を作り始める。二人の家づくりのイメージの中で積み

木を横、縦きれいに組み合わせ、協力しながら作り出す。

あそびの途中、Ｓ児がＹ児に「もっと使いたい！Ｙちゃんの貸して！いっぱいもっとるが」と訴えるが貸してくれない。また、もっと大きな物を作りたいとＹ児を誘うが断られる。「これはＹの家だけぇこわさんで！」と自分で作った家にプライドを持つ。同じ空間の中ではあるが、それぞれがさまざまな心の葛藤を経験している様子が伺える。

Ｙ児はあそびが経過する中で、Ｓ児とＭ児が二人のイメージを膨らませ、今までの家より大きな物に挑戦しようとする姿を見て、友だちの楽しそうな姿に共感する。一人よりも友だちとあそぶ方が楽しいと感じることができたのか、「ぼくのも使う？」と誘いかける。

三人の「一緒につくりたい！」気持ちが重なり、イメージや一緒にあそぶことの楽しさを共有し、友だちと協力する楽しさを味わうことができたと感じる。

保育者は傍につき見守るだけであったが、子どもたち同士であそびのイメージを共有し、一人から数人の友だちへのあそびに発展できたことは子どもたちの育ちにつながっていると感じ、嬉しく思う。一人から三人、三人から五人と友だちの輪がどんどん広がり、クラスみんなが共有できるあそびを今後展開していきたいと感じた。

《考察》

・同じあそびを同じ場所で楽しんでいても平行あそびの３歳児。自分のことだけでなく少しずつまわりの友だちの様子、あそびにも興味を持ち始めた。

・時には遊具の取り合いからけんかになることもあるが、少しずつ友だちと分け合ったり順番に使ったりするなどあそびの中の決まりやルールを守ることを覚え始めるのだと思う。このような経験を繰り返しながら、次第に他の子どもとの関係が、子どもの生活やあそびにとって重要なものとなってくる。そして関わりを深め共通のイメージを持ってあそびを楽しむようになると考えられる。

・楽しさを共有したり、模倣したりする中で、友だちの思いにも気づけるのだと感じる。

・友だちと一緒に遊ぶことで自分の思いだけを優先するのではなく、我慢したり、待ったりなど友だちとの距離感を感じることが出来る。

・積み木を通して、積み上げながら数を数えたり、友だちの高さと比べたりしながら形や空間、物の属性の認知ができるようになってきた。

・少人数でのあそびをしっかりと経験し、少しずつ友だち関係が広がるよう集団で共有できるあそびをどんどん広げ、保育に取り入れていきたい。

事例７　積み木あそび～数人からクラス全体に～　　１月２２日（火）

ねらい…○積み木を使って思い思いの物を想像して作ることを楽しむ
　　○気の合う友だちとイメージを共有してあそぶ
　　○遊びの中で友だちと言葉のやりとりを楽しむ

学びの要素…○経験したことを話せる（理解言語・記憶・文章暗記）
　　○車庫や道路をつくる（認知・物の属性の認知・空間の構成）
　　○形の仲間集め（物の属性の認知・図形の属性・形）

先日あそんだ積み木での構成遊びをクラス全体で楽しめるよう計画する。今回はたくさんのかまぼこ板を部屋いっぱいに使えるよう環境を整える。

イメージを持ってすぐにあそび出す子、友だちの様子を伺う子、全くイメージが持てない子とさまざまな姿が見られる。あそんでいる子どもの傍に寄り添い、「何をつくっとるだ？」と訪ねる。Ａ児は得意そうに「道を作って車を走らせる」と言う。Ａ児の姿を見て、まわりの子どもも少しずつイメージが持て始め、あそびがスタートする。保育者は見守りながら、子どものつぶやきをまわりの子どもに伝え、よりイメージが持てるように心掛ける。

まったくイメージが持てない子どもには保育者があそびに加わり、あそびのヒントを出す。かまぼこ板を横、縦に積み重ねる姿を見て、「お家みたい！」「高い！ビルみたい」とつぶやくＳ児。その隣で「トンネルみたい！」と道を作っていたＡ児の様子を見てイメージがつながった子どももいた。

一人ずつ、少人数のグループ毎でつくっているものは違っていて当然と考えながらも友だちと遊具を通して少しでもつながっていけるような援助を行うようにした。保育者の関わり方、仲立ちの仕方を考えていきたいと感じた。

子どもの集中も続かなく別のあそびを楽しみ出す子どももいたが、最後まで集中してあそぶ子どもの姿も見られた。部屋いっぱいにかまぼこ板で道ができはじめる。数人の友だちが代わる代わるかまぼこ板をつなげ、真っ直ぐや曲がり角の道が続く。ひたすら無言で楽しむ子どももあれば、一つずつおしゃべりをしながら置く子と子ども一人ひとりの個性を感じることができた。

またあそびの中で順番に使ったり、待ったりするきまりが自然に身につき、あそびの中で発揮している様子が伺えた。端と端がつながったときには子どもたちの歓声が上がった。一生懸

命つなげた思い、また子どもの満足感、達成感をしっかり味わうことができたと思う。

また、かまぼこ板でのあそびは友だちとつながるだけでなく、手先指先までしっかりと集中させる根気強さも大切な要素となっていく。じっくり集中できる環境の中で個々の育ちを保障するとともに、友だちとあそぶ楽しさ、おもしろさを感じられるようにしていきたい。

無心であそぶ姿こそが子どもの一番の集中であり、真剣なまなざしこそが『学び』への第一歩なのだと感じた。

《考察》

・今回のあそびでは友だちとつながるあそびを考え設定したが、クラス全体でのイメージの共有は難しく、個々、少人数毎でのあそびを展開していく。隣の子どもの思いやイメージに気づいたり、一緒にあそぼうと気持ちに寄り添えたりすることができたことが、友だちとのつながりの第一歩だと感じた。

・道路や車庫をイメージして作る中で、空間の構成ができはじめる。

・あそびを通して、手先指先の発達、イメージの持ち方、ことばのやりとりの仕方等、個々の育ちに着目し、一人ひとりの成長をしっかりと確認することが大切である。個々の育ちをしっかり保障し、集団の育ちにつながるよう日々の保育を組み立て、あそびを展開できるようにしていきたい。

じっくりとあそびが楽しめる環境づくり

３歳児クラスの環境構成を見てみると、あそびを選択することが難しく、あそびたい遊具を保育者に伝えて保育者が準備するという流れの中で子どもたちは生活していた。しかし、このような中ではこどもたちのあそびへの自発性は育たず、近くにある玩具でしかあそぶことは出来ない。

そこで、保育室の一角に安心できるコーナーをつくり、子どもたちの興味のある玩具を準備した。本来あそびは自分で考え、選び、作りだす物だと考える。その中でこそあそびへの好奇心、探求心が育まれるのだと思う。そして、それこそが『学びの育ち』につながると考える。

保育の環境（保育所保育指針より）

保育の基本は環境を通して行うこと。保育の環境とは保育士等や子どもなどの人的環境、設備や遊具などの物的環境、として、自然や社会の事象であり、こうした人、物、場が相互に関連し合って保育の環境が作り出されている。「子どもの生活が豊かなものとなるよう、計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない」としている。

①子ども自らが関わる環境

子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、さまざまな経験を積んでいけることが重要。子どもが思わず触りたくなるような、動かしてみたくなるような、関わりたくなるような魅力ある環境を構成することが重要。

②安全で保健的な環境

③温かな雰囲気といきいきとした活動の場

「温かでくつろぎの場」であるとともに「いきいきと活動できる場」となるよう環境を構成する必要がある。活動の静と動のバランスや子どもの発達過程などを踏まえ、一人あそびや少人数でのあそびに集中したり、ほっとくつろげる時間と空間が保障されたりする環境が大切。

④人との関わりを育む環境

「人と関わる力」を育てていくことの重要性から「子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境」が必要である。子どもは身近な子どもや大人の影響を受けて育つ。子どもがさまざまな状況を作り出すことが大切であり、同年齢の子どもの関係、異年齢の子どもの関係、保育士等との関係や地域にさまざまな人との関わりなどによってさまざまな感情や欲求が生まれることを踏まえ、保育の環境を構成していく。子どもが人とのやりとりを楽しみながら、子ども相互の関わりや周囲の大人との関わりが促されるような環境を構成していくことが求められている。

４．研究のまとめ

○学びを促す援助の基本は「関心」のありかを知ること

・事例１、事例２、事例３のあそびの様子から、「なんでだろう」と問題意識を持った子どもは「見てみよう」と問題解決に向けて取り組みを開始する。さらに「どうしてそうなるのかな」と、これまでの理解をもとにあそび、学びをしながら理解を広げていく。最後に「もっと知りたい」と理解を深めたり発展させたりする。子どもの興味、関心をしっかりと受け止めるこが学びの芽生えを促す出発点になるのだと感じた。

○「周囲から認められている」という実感が持てるように

・子どもは心に不安を抱えていると学びには向かえない。一人ひとりの子どもが保育者や仲間から「自分は認められている」という安心感が実感できる環境を整える。（じっくりとあそびが楽しめる環境づくり事例より）

○あそびを「広げる」「深める」視点を持つ

・子どもがあそびこめるように他の子どもに「広げる」は事例６、事例７のように一人のあそびを仲間とのあそびにつなげたり、異なる環境や素材で試したりすること。そして「深める」は保育者がつねに活動の見通しを持って子どもとともに考えて次の一歩に展開していくことが大切である。

○保育者が「あそびの見通し」をもつ

・発達段階やあそび・生活経験などを踏まえ、事例４～事例５のように「どのように展開させるとよいか」というあそびの見通しをもっておくことで、先を見据えた援助になり、子どもの学びを促しやすくするのだと感じた。

○生活の流れを身につけ（近い）見通しをもって生活する力

・３歳児の「生きる力」で述べたように、基本的生活習慣を身につけること、生活の基盤を作ることが大切であり、自分のことを自分でしようとする意欲やできたという自信の積み重ねの中にこそ一人ひとりがやりたいあそびを見つけ、友だちとあそびを進めていくことができるのだと感じた。

○発達のめやす～個の育ちから集団の育ちへ～

・発達のめやすはさまざまなカテゴリーや視点から一人ひとりの子どもを見ていく上で月齢に合わせた発達が確認できるようになっている。しかし、保育園という集団の中で育ち合う仲間関係を見ていくことは難しい。個々の育ちだけでなく、集団としてクラスとしての育ちをしっかりと見つめることが大切であると感じた。

５．おわりに

・子どものあそびを充実するためには、「自ら選んで行う活動」と「クラス全体の活動」との関連性を考えた保育を進めていくことが大切である。また、あそびの中の学びを充実させるためにも必要だと考える。

・子どもが「生きる力」をつけるためには、保育者は一人ひとりの発達をていねいに見ていくとともに、クラス全体が今どのような育ちを援助する時期なのかをつねに心に置くことが必要である。子どもの興味・関心がどこに向いているかを明らかにして保育にのぞむことで、保育者は援助や環境構成を明確に行うことができると考える。

・０歳から５歳の発達、あそびの充実こそが生きる力の基礎作りとなる。

・幼児期に楽しいあそびをたくさん経験し“やってみたい”“挑戦したい”という意欲や探求心が高めていきたい。子どもが就学し新しいことに出会ったとき、いろんな事にチャレンジできる子どもをめざし、幼児期の土台作りを大切にしていきたい。

（引用・参考文献）

「新保育所保育指針を読む［解説・資料・実践］」　全国社会福祉協議会

「０歳からの教育」　島田教明・辻井正著　（株）オクターブ
～スマートプロジェクトメソッド～

「小学校にいくまでに」　ロビン・コックス

「子どもと保育３歳児」　秋葉英則・白石恵理子著　かもがわ出版

「就学前教育と学校教育の学びをつなぐ　小１プログラムの予防とスタートカリキュラム」
新保真紀子著　明治図書

「小学校までにつけておきたい力と学童期への見通し」　丸山美和子著　かもがわ出版

「あそんで学ぶ　文字・言葉」　グループこんぺいとう著　黎明書房

「あそんで学ぶ　数・形」　グループこんぺいとう著　黎明書房